

令和 7 年 8 月 26 日
拡大豚熱疫学調査チーム

1. 早期発見・早期通報

今回検討対象とした事例においても、同一の離乳豚群における下痢や食欲不振等が確認されていたにもかかわらず、豚繁殖・呼吸障害症候群（以下「PRRS」という。）によるものと判断するなど豚熱とは異なる原因によるものと判断したために通報が遅れたと考えられる事例が認められた。これまでの検討会においても数次にわたり提言しているように、通報の遅れは農場内におけるウイルスの増幅につながり、地域におけるまん延の大きなリスクとなる。農場においては日頃から丁寧に飼養豚の健康観察を行い、通常と異なる様子が認められた場合には、管理獣医師や最寄りの家畜保健衛生所に躊躇なく速やかに連絡することが重要である。

2. 基本的な衛生管理の徹底

今回検討対象とした事例では、衛生管理区域への立入時の手指消毒、作業着の交換や、豚舎破損部の修繕等、ソフト・ハード面における飼養衛生管理上の不備が認められた農場があった。また、農場が複数の衛生管理区域からなるにも関わらず、各衛生管理区域専用の作業着及び長靴への交換、手指の消毒等を実施していない事例も認められた。飼養衛生管理基準は家畜の所有者が遵守すべき基準であり、当該基準の遵守とワクチンの適切な接種は、農場において豚熱の発生リスクを低減させるための対策の両輪である。ワクチンを接種しても一部の個体は抗体価が上がらないことがわかっており、ワクチンのみで感染を防ぐことはできず、PRRS 等の免疫機能を阻害する疾病対策も豚熱対策として重要であることから、ワクチンを過信することなく、飼養衛生管理基準を遵守した衛生管理を行うことが必要である。

3. 適時のワクチン接種

現在母豚として使用されている豚の多くは、ワクチン接種をされていない母豚から生まれた豚（以下「第 1 世代の母豚」という。）ではなく、ワクチン接種済みの母豚から生まれた豚（以下「第 2 世代以降の母豚」という。）であると考えられる。第 1 世代の豚は、ワクチン接種後に顕著な抗体価の上昇がみられるが、第 2 世代以降の豚は、第 1 世代の豚と比較して、ワクチンを接種しても抗体価が上がらず、ばらつく傾向にあることが知られており、第 2 世代以降の母豚から生まれた豚は、第 1 世代の母豚から生まれた豚に比べ、全般的に移行抗体価が低いレベルでばらついており、豚熱を一定程度防御できる水準以下まで移行抗体価が下がるのも早い。このため、第 1 世代の母豚から生まれた豚よりも、早い時期にワクチン接種を行わないと、十分な抗体価がない免疫の「マド」が生じ、豚熱ウイルスに感染するリスクが高くなる。

このため、哺乳豚へのワクチン接種日齢については、前例に倣うのではなく、直近に行った免疫付与状況確認検査の結果や母豚の入替え状況を踏まえ、農場ごとに接種日齢を設定することが重要である。

4. 野生イノシシ対策

国内 99 例目では、発生前半年間に農場から約 9 km の地点で豚熱陽性のイノシシが見つかっているものの、半径 3 km 以内ではイノシシサーベイランスにおける陰性個体も見つ

かっておらず、現地調査時の農場主からの聞取りでも農場周辺で野生イノシシは見ないとのことであった。一方、発生後に群馬県が行った農場周辺での調査では農場から約1.5 kmの地点で野生イノシシによるものと思われる痕跡が確認されている。

このように、農場の周辺においてイノシシの存在を農場主が認識していない場合であっても実際はイノシシが生息していることから、農場周辺が豚熱ウイルスにより汚染されていると考え、作業着及び長靴の交換、車両の適切な消毒等ソフト面の対策や適切な高さの農場周囲柵の設置等ハード面の対策等飼養衛生管理基準の遵守を徹底することが必要である。

5. 飼養豚の免疫に影響する要因への留意

近年多産系と呼ばれる母豚の普及が進んでいる。多産系の母豚は、一回の出産頭数が乳頭の数を超えることも多く、体が小さい哺乳豚が競争に負け、十分に母乳を摂取できない状況が生じやすい。また、分娩数によって母豚の初乳の生産量は変わらないため、競争に負けた哺乳豚は、初乳を介した移行抗体の摂取が十分にできない。豚は胎盤を介して移行抗体を受け取ることができないことから、出生後速やかに初乳を摂取することが豚熱をはじめとする感染症からの防御のために極めて重要である。多産系の母豚を利用する農場においては、すべての新生豚が初乳を十分に哺乳ができるよう配慮することが重要である。

また、PRRS や豚サーコウイルス感染症は感染豚の免疫を抑制し、これらの感染豚に豚熱ワクチンを接種した場合に免疫付与に悪影響を及ぼすことが示唆されている。豚飼養農場においては、PRRS 及び豚サーコウイルス感染症の浸潤状況を適切に把握し、状況に応じた対策を進めていくことが豚熱の発生予防の観点からも重要である。

加えて、母豚の入替えや肥育豚の導入元の変更を行った場合、新たに導入した豚とこれまで飼養していた豚との間で免疫の状態やワクチンのテイクのしやすさに違いが生じる可能性がある。可能な限り、新たに導入した豚の導入元の農場における免疫付与状況等の情報を入手し、新規導入豚に対するワクチン接種のタイミングを検討するなどの対策を講じることが重要である。